

温泉文化の源流を巡って—ギリシア・ヨーロッパ、  
中東、南米(インカ文明)、日本

特定非営利活動法人健康と温泉フォーラム

常任理事 合田 純人

*Tracing Thermalism to their Origins*

*Sumito Goda, Executive Director*

*The Forum on Thermalism in Japan*



### ヨーロッパ温泉文化の源流

ギリシア神話の名医アスクレピオスは太陽神アポロの子で、医術あるいは健康の神様として崇められ、その子孫アスクレピタルは代々アスクレピオスを祭った神殿アスクレピオンに仕える僧であると共に医術を司った。西洋医学の父と呼ばれるヒポクラテスはアテネの南東トルコ領小アジアの沿岸に近いコス島で生まれ、この島の小高い丘に位置するアスクレピオンで医術を学んだ。紀元前200年ごろ発刊されたヒポクラテス全集の中の鉱泉論では、「温泉浴は健康に効果があると」書かれており、鉱泉の研究が後の西洋医学発展の第一歩であった。コス島のアスクレピオンは3層の建物の中に温泉が湧出し、祈りの場として又、心身の清めと癒しの場として利用されてきた。現在は浴槽の遺跡が残っているだけで、温泉は枯れていたが、感謝の気持ちを完治した疾患部を模して奉納したテラコッタ(陶土)が残っており、日本の神社の絵馬奉納と同じ風習である。古代ギリシア文明の泉・生命の水(イゾールゾイス)信仰は古代ローマ帝国へ受け継がれることとなった。

もう一つの温泉文化の源流として広く乾燥地帯が続く現在の中央アジア域を基点とする考え方がある。東へはシルクロードを経て九州北部へ「ムロ」とよばれた蒸し風呂を、西に同じくシルクロードを経てペルシア(現在のイラン)そして現在のトルコ・イスラエル・エジプト域に「ハマーム」(蒸し風呂)を普及させた。砂漠の都市メッカで生まれたイスラム教はこれら中近東諸国をイスラム化する過程でも積極的に清潔を推奨しハマームやギヤマンベ(温泉浴場)を各地に整備させた。これら乾燥地帯の「ハマーム」文化はクレオパトラの古代エジプトで洗練され、アロマ浴(芳香浴)など官能化され、様式化された浴場文化はやがて古代ローマ帝国で水浴(温泉浴)文化と融合し、テルメ(公共複合温浴施設)として大衆文化の一つとなった。やがてローマ帝国の地中海・ヨーロッパ大陸への覇権にともない、各地で温泉が開発され、ローマ式都市が建設された。現在のバーデン・バーデン、エクス・レ・バン、ブタペスト、ダックス、パース、ヴィシーなどヨーロッパを代表する温泉地はすべて古代ローマ軍団の駐屯地であった。



中世のキリスト教社会では温泉文化は停滞したが、ルネッサンス時代に入ると古代ギリシアや古代ローマ文明への憧れや生活観が見直され、王族・貴族など上流社会の保養・社交場として温泉地は賑わった。又、温泉地は産業革命以降振興した企業家、軍人、芸術家などが病氣や戦傷などを療養する場としても発展した。一般大衆が療養に温泉地にでかけるようになったのは、19世紀初頭のことであった。温泉地は保養・療養地として社会保険制度にも取り上げられ、医療として発展したが、現在の温泉地は社会医療(クア)から健康保養(ベネッセ)へと変貌している。



### 日本の温泉文化の源流

一方、わが国は火山国として多くの温泉が湧出している。山河に囲まれ緑豊かな日本の地形・

気候は又、日本人の自然信仰(アニミズム)と一体となり独特の温泉文化を発展させた。わが国の温泉文化は記録された多くの文献(古事記、日本書記、各地の風土記、万葉集など)から当時の風習など窺い知ることができる。古代の日本の風俗、習慣のなかに水で祓い清めるという行為(禊)がすでに存在していたことを示している。東北地方では現在でも産湯や湯棺に温泉が使われている。又、山岳信仰では大地から溢れる温泉がご神体として崇められている。東北地方を中心に湯治文化が農村社会のなかで生き続けている。江戸のような大都会では湿気の多い日本の風土から銭湯文化が花開いた。庶民の移動の自由さがゆるむにつれ、限られた階層にしか許されなかった温泉地への湯治が大衆化し、温泉地は観光遊興の場として栄えて現在に至っている。



### 結び

欧州の温泉文化がいま、医療から病氣予防へ大きく転換している今日、わが国では、観光から病氣予防へとニーズが移行し、各地の温泉地がこれらのニーズに応えられなく、低迷する原因となっている。ヨーロッパと日本この二つの大きな温泉文化が異なる方向から一つの方向を目指し始めた今、それぞれの源流と歴史の原点に戻り、これからのわが国の温泉のあり方を今一度考えてみることは重要なことではないだろうか。

———日温気物医誌72巻1号に寄稿